

の默示を得べく家を出でぬ。(中略)水は滾々として晝夜を捨てず、月は依稀として万古に懸る、蟲聲の微も草露の小も水も共に無限の秘義あり」とは有島先輩の日記である。

秋の自然美は静寂にして此れを求むる者は其の長きを欲するけれど、北國の秋は瞬く間に過ぎ、西風颯々と吹き來つて北海道に冬は訪れる。既に十月の下旬ともなれば手稲山頂には白雪を頂き、寒威忽ちに萌し六花霏々として舞ふ。此の冬こそ實に若人にとつて試練の時であり、沈潜の期間である。この殺伐な冬をも當時の學生は愛しないでは居なかつた。「跌宕豪逸の景は冬間にあり、朔風一陣樹梢を衝いて颯然響をなし平和を破るの台圖をなすや、忽ちにして大風騷然として起り、往々にして一秒二十三尺突の速度をもつて走る。其高く走るや勁枝を動かし家屋を震蕩す、其低く走るや巨幹を發き、積雪を吹蕩す、雪に亂射せられたる彈丸の如く、水平に雷射し破壊せざれば止まざらんとするの意氣を示す、須臾にして風收まり、亂雲跡を收め、日月懸々として、古戦場の跡を照すを見るのみ、其起るや既に條忽たり、蓋し學に志すものは又這般の氣概なかるべからず、而して世之を愛ふ、因循風をなし姑息俗をなす、札幌あり、希はくは此雄渾絶偉の風氣を享け、万里長風に駕し、能く世界の上に進歩の旗幟を翻すを得ん」(札幌農學校)「北海の冬や、豪放なり猛烈なり、其の峻々として千里際涯を見ざる所、一陣の北風藻岩山嶺を摩し來り、瓊を碎き珠を亂し、氷雪煙の如く空中に躍り、天地晦暝、澎湃として千軍万馬の一時に襲ふが如き者、殆んど五ヶ月、此長日月吾が青年は如何に其生活を送る。彼等は讀書に耽れり、學術に身を委ねり、集會に辯を彰せり。若し其れ寒月玻窓に

映じて一燈の幽なる所、紅爐を擁して其の愛好する所の書を展べ來れば興味津々春風懷に和ぐが如く心頓かに更まり、情致油然として湧き、亦夜の更くるを知らざるなり。況んや友あり雪を衝て來り會するをや。正に是れ鹽煎餅一枚は大牢の一盤に當り、澁茶一碗は渴を醫して談柄とするに餘ある者、嚴寒夜話の情味、吾が北海道に於て之を見る」(札幌農學校)實に此の妙味こそ一度北國に冬を送つた者にとつて忘れ難い思ひ出であらう。さらに冬期の學生の娛樂は雪戰にスケーティングに山滑りに壯快なる妙技を振ふことである。當時の札幌市民は此等の諸技を吾學生を師として學んだの觀がある。此等の諸遊戯は實に壯快極まるものであつたが、就中雪中の手稲山登山は其の最も雄壯無比なものとして第一に指を屈しなればならない。今其の景況を記さう。「時正に二月の候、氷雪漸く弛みて夜間の寒に凍り、翌朝尙錯々として僅かに足跡を没す。此の時に方り彼等は蓆を負ひ金剛杖を提げて上る。山は札幌を去る三里手稲村の南にあり、海面上を抜く四千有餘尺、峻潔玲瓏旭日之に映じ、眩然として老仙の如し、彼等は今や其半腹にあり、忽ちにして山風一颯、山角を摩して來る、其勢奔馬の如し、乃ち彼等は雪面に俯して之を避く、斯くの如くすること數度、恰も之れアルプスの險崖を攀づるが如し、富岳の峰剣に上るが如く、勇壯豪放北海の特絶以つて味ふべし、已にして頂上に達す。首を回らして四顧すれば、南部石狩の山脈巒々として白龍の尾を振ふが如く、臨眺圓山の諸山は玉筍を拜るが如く、風物一變勝景更に奇なり、而して白皚々其際涯を見ざる者は石狩の平原にして、紺碧一湛其西に現はるゝ者を日本海となす。乃ち負ふ所の蓆を敷き、而して滑下す、倏然雪碎け、瞬息四

千尺夢、寢の如く、麓に達す、恰も之れ儼然として翰羽を生じ、風に御し虚を踏み、企然下界に下る者其の捷快何んぞ耐えん、是れ北海に來りて初めて見るべきなり。山滑りの如く壯快な冬の生活に十分に鍊えられて、長い冬の間をも活氣をもつて送つた彼等は再び廻り來る四月の春光を迎へるのである。

結

「人なる師はいくらでもあります。人の設くる設備はいくらでも設くることができます。然し乍ら壞たれし天然は再び之を取返へすことは出来ません。北海道も亦俗人の手に委ねられて其の汚す所となり、青年の心を潔め其の志を高からしむる能力を失ひました。今や北海道帝國大學は札幌農學校の相續者として存在しますが、其教育上の威力に至つては到底舊い小さい農學校に及ばないと思ひます。これは大學に有り得ないものが農學校にあつたからであります。石狩平野の處女林、其樹木に巢を作りし鳥類、其樹影に咲く雜草、石狩千歳豊平の諸流に群がし魚類、是等が最良の教師でありました。そして是等のものが俗人輩に取りつくされて、北海道は青年蕪陶のための最も良き師を失つたのであります。位階勳章に誇る此世の博士等を幾人連れて來つても到底自然が施すやうな善き教育を施すことはできません。」

たしかに明治初年の札幌の環境は高潔偉大なる感化力を持つてゐた。成程今日札幌の自然は害れ、北大生は最良の師を失つた。北大沈滞の聲ありとせば、其の第一原因は實に其處にあるのである。

併し顧みて、今日と雖も尙且つ北大の環境は實に偉大なる自然の教師に恵まれて居はしないか。春まだ浅き白楊の雪解の小路をさまよひ、大學の小川のほとりにたゞすめば、トン魚のさゝやかな群がスイ／＼と潜つてゆくではないか。トン魚の群のかくれた邊りには、おぼろげな水芭蕉が今も尙美しいではないか。水芭蕉をかこんで彼方の原始の森にまで續くローンは目覺めるばかりの若緑に輝いて既に羊の影が二つ三つゆらいでゐる。幸多き北國の春の日である。タンポポが限りなく咲いて夏ともなれば、滴るやうな緑の枝を展げやはらかい芝生の褥の上にエルムの老樹が、今も北大生に讀書の木蔭を作つてくれてゐる。夕べ手稻の夕焼に浩然の氣みなぎり、晨豊平川のせゝらぎに耳を澄ましめて啓示をきかざる者は度しがたし。かくも大いなる教師に圍繞されながら、先人の高き生活を嗣ぎ得ざるは、我等價値の劣れるもの、故である。「彼の大空も、價値の劣つた人々の頭上に垂るゝ時は、其の偉大の度も亦減するのである。」文明の急激なる發達は、同時にその生活環境を自然から反自然の方向に押し流さうとする。しかし乍ら、心志の高潔を目指し爽やかな理想の花咲く眞實のために限りなき努力をさゝげんとする者には、北大の自然は永遠の教師であつた。先人の生活力の中には、心から自然を喜び愛してゆく氣力があつたのだ。私はじみじみさう思つた。そして自然を教師として學んでゆくといふことは決して怠惰な者にできることではないことを痛切に自覺するのであつた。高き學

生々活への生氣のない者に、自然を本當に爽快に享受し、師と仰ぐ氣持が湧く筈もない。文明の易きに付き、市井に滲染する怠惰なものには、唯心をたのしませるもの、といふ様な甘い自然しか見ることができない。自然の尊い感化力に動かされて、自らも働く、といふ建設の精神は、怠惰な輩にあり得ない。涯しない雪原は、今も昔も變りなく續いてゐる。誰一人通らない雪の道を、動くものとしては唯暗い大空に托けてゆく煙のみの夜更けに獨り歩いてみよ、隈なき月の雪明りに、白夜のやうな戸外に立つて、きらめく北極星を仰いでみよ——實に汝の魂は高潔にみがかれ孤獨な汝の眼を通して大自然の生氣は脈々として汝の全身に注ぎ込まれるであらう。

否々、更に積極的には愛汗の生活をつゞけた豫科作業班K君は現に語つてゐるではないか。「内村先輩が慨嘆之を久しうして更に十七年、町も自然も次々と俗人に蝕食まれてしまつてゐるのです。魂も一緒に俗化されて行くのを歎いてゐる我々ですが、併しかうして未開の石狩の野に立つとき、勃然として吾等の心の中に農學校時代の精神の甦つてくるのを感じるので。豪宕なる寮歌と共に、先輩の心に結ばれてゐるのを覚えるのです。開拓の精神が盛り上つてくるのです。楽しいではありませんか。農學校の先輩達もきつとかうして大地に鉄を打込みながら思索したのだらうと思ふのです。」

自然科学者である先輩がその研究に當つて、その自然の靈妙を感じては素晴らしい實驗結果に對して感謝の祈りを捧げた如き、挺身研究且つ敬虔な態度は、深い自然への愛が與つて力あるものと考へるのである。自然への愛は深い感化力をもつ北國の自然が強烈な働きかけをなして而して我々の心にそ

れに耐へて亨け容れるだけのものがあつて初めて湧き上るものであることを考へる時、我々の心は自然に對して準備され目覺まされなければならないのではなからうか。此の氣こそ人生の素朴なる出發點であると考へるのだ。

札幌農學校寄宿舎關係諸規程拔萃

(札幌農學校一覽ヨリ)

札幌農學校會則抄(明治三十二年五月二十二日決定)

第一條 本校寄宿舎ハ校費生ヲ寄宿セシムル所トス

但シ私費生ト雖モ許可ヲ得テ入舎スルコトヲ得

第二條 本科私費生ニシテ入舎セント欲スルモノハ左ノ書式ニ依リ出願スヘシ

(書式)(用紙半紙)

私儀入舎仕度候間御許可被成下度御許可ノ上ハ會則ヲ嚴守仕候此段奉願候也

本科第何年級學生

氏

名 印

年 月 日

屬 籍 住 所

札幌農學校長 氏

名 殿

保 證 人 氏

名 印

第三條 食料及諸雜費ハ毎月末日限り舎監部ノ檢證ヲ經テ賄方請負人ニ支拂フヘシ若シ之ヲ支拂ハ

サル者アルトキハ保證人ヨリ徴收スヘシ

前項ノ金員ハ其未拂三週日ヲ超ユルコトヲ得ス

第七條 寄宿生ハ左ノ諸件ヲ遵守スヘシ

一、室内ヲ清潔整頓ナラシムルコト

二、舍内ニ於テハ靴又ハ草履ヲ用フルコト

三、午前六時乃至七時晨起スルコト

四、午後九時三十分乃至十時三十分就寢スルコト

五、午後十時煖爐ヲ消火スルコト

六、午後十時三十分消燈スルコト

七、外出スルトキハ消火消燈ノ上室内ニ相當ノ締ヲ施スコト

晨起就寢ノ時間ハ鐘ヲ以テ之ヲ報ス

第十一條 寄宿生ノ外出時限ハ左ノ如シ

一、平日ハ午後九時迄

二、休業日ノ前日又休業日ハ午後十時迄歸舍ノ定刻ヲ過クルトキハ舍内ニ入ルコトヲ許サス

但正當ノ理由アルモノハ此ノ限ニアラス

第十二條 歸舍定刻ニ後レタル者ハ其ノ理由ヲ詳記シタル書面ニ保證人連署ノ上三日以内ニ舎監部

ニ差出スヘシ

第十三條 寄宿生外出スルトキハ制服ヲ着用スヘシ

但シ正帽袴ヲ着用スルコトヲ得

第十六條 寄宿舎一室ニ備付ノ物品ハ左ノ如シ

但シ私費生ノ室ニハ椅子・卓等備付ケサルコトアルヘシ

椅子	二	卓	二	寢臺	二
置戸棚	一	煖爐	一	帽子掛	二
陶器壺	一	亞鉛桶	一	紙屑籠	一

第二十一條 寄宿舎ニ關スル願屈ハ總テ舎監部ニ差出スヘシ

第二十二條 食事及浴場時間ハ左ノ如シ

朝飯 自前七時至同八時

晝飯 自正十二時至午後一時

夕飯 自午後五時至同六時

浴場 日曜日及水曜日自午後三時至同六時

第二十三條 寄宿生中二委員長一名委員三名ヲ置キ舍監部ノ監督ヲ受ケ左ノ事項ヲ負擔セシム

一、學費ノ出納ニ關スルコト

二、寄宿生ニ關スル命令其ノ他ノ事項ヲ傳達スルコト

第二十四條 前條各委員ハ寄宿生ノ互選投票ニ依リ之ヲ定ム

但シ被選者ハ其旨舍監部ニ届出スヘシ

第二十五條 委員長ハ委員ヲ監督シ本舍則第二十三條實行ノ責ニ任ス

第二十六條 本舍則ニ背戾シタル者ハ退舍ヲ命ス仍ホ情ノ重キ者ハ本校々則第五章懲罰規程ニ據リ

處分ス

舍監部規定(明治三十二年三月改正)

舍監部ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一、學生々徒ノ賞罰ニ關スル事項

二、寄宿舍取締ニ關スル事項

三、學生々徒ノ集會及印刷物ニ關スル事項

四、衛生及風紀ニ關スル事項

五、學生々徒ノ體格検査ニ關スル事項

校費生ニ關スル規定

一、學生中學業優等品行端正ナル者ヲ選ヒ校費生トス(第四章校則第四十九條)

一、校費生ハ授業料ヲ免シ學費トシテ月額七圓ヲ給與スルモノトス(同第五十條)

一、校費生ハ本校寄宿舍ニ入舍スルモノトス(同第五十一條)

一、校費生ハ十二人ヲ以テ定員トナス(同第五十四條)

一、校費生ハ每學年末ニ於テ教官會議ヲ經テ校長之ヲ定ム(同第五十七條)

一、校費生病氣ノ爲メ要スル藥餌ハ現品ヲ以テ支給スヘシ(第五章學資支給規定第四條)

一、校費生病氣性質及事業上傷痍ヲ受ケ醫師ノ診斷ニ據リ入院治療ヲ要スル者ト認メタルトキハ三

十日以内ノ入院料ヲ支給スヘシ(同第五條)

一、私事ノ故障等ニ據リ寄宿舍ニ宿泊サセルコト三十日ヲ踰ユル者ハ學資ヲ支給セス(同第六條)

宮部先生訪問記

十二月二日夜我等係四名は渡邊先輩と同行宮部先生を訪問した。こんど出来る「惠迪」増刊の惠迪寮小史について題字を書いて戴かうと思つたからである。又合せて、農學校初期の唯一の先輩のお話を伺ひたかつたからである。道々皆でその楽しみと喜びを語り合ひつゝ行く、先生は前夜お電話してあつたので御在宅、「澤山来たな」と應接室の戸を開けて僕等を迎へて下さつた。

先づ渡邊さんから今度の寮史の説明をして題字についてお願いした所「それはこまつたなあ」と謙遜して居られたがその内にラジオがニュースを放送し始めたので皆で聞く。先生の應接室は居間を兼ねて居るらしく東と南が窓になつてゐる洋間で十四・五疊もあらうか、奥にはテーブルあり書類や硯墨が整然とそろへてある、北側の壁に面した大きな本箱は書類が一杯である、中に北海道史や惠迪寮史が並んでゐるのを見て、先生の學問に對するゆかしさをしみ／＼と感じた。

ラジオは丁度開戦一週年を迎へるに當つて香港攻略の酒井中將の懐古談を發表してゐたが、それに聞き入つてゐる先生の姿は眉毛は厚く頬は豊かに肥えて、八十歳を三年も越へた御歳とは思はれぬ程の強健さと落着きとを感じた。ラジオが終つてからいよ／＼先生のお話を伺うのだが僕等は馴れぬし歴史にもそれ程通じて居らないので思ふ様にすらく／＼話は出来ない、先づ戦争の世間話から始めて主

に渡邊さんが話を進めて下さる。クリスチャンネームの事を御訊ねした所、あれは今から思へば全く子供の様ではあつたが、第一回の洗禮の時につけやうよからうと云ふのでつけたゞけで、何の意味もないしその後も全く使はれなかつたさうである。

昔開校當時は教師が全部日本語の全くわからない米國人であつたので、講義は全て英語であつた。我々が考へると聴き取る丈でも大變に思はれるが當時の人達はそれをノートしてゐたのである、宮部先生は「それ程苦勞ではなかつた」とおつしやるが歸寮後にダブルノートまでして整理してゐたさうであるから決して容易い事ではなかつたであらう。教科書も學校が米國から取りよせて學生に貸してゐたので、物理、植物等の教科書があつたやうである。又先生のお話によればその頃の教師はマサチュセツ農科大學の人達で皆若くて始め來た時は獨身だつたが、二年位住んでから皆一度歸國して妻君をつれて來たさうだ。又米國人は非常に日本に好意を寄せてゐて、外人教師も決して良い加減な氣持でなく、本當に日本に盡す積りでやつて來て居たと聞くが、この意氣でこそ吾等が大先輩と仰ぐ様な人達が續々輩出したのであらう、惜しいかな日露戦争以來米國人の態度もすつかり變つて遂にそれが今日の様な状態にまで立ち到つて居る。

昔は學校では學科が餘り多く分れてゐなかつたので生徒が各人で好きな事を専門に勉強した、内村鑑二氏の水産、宮部先生の植物を始め新渡戸先生の動物や化學等をやる者が居り放課後に採集に行つたりゆるしを得て午後實驗をしたりして居たさうである。

特に内村氏の卒業の時の講演に、學問の一部門として水産學の出來ねばならぬことを説いて居られるのを指摘して、内村氏の先見の明のあつた頭の良さを褒めて居られた、内村氏は兵式體操とドロウをのぞいては殆んど満點に近い點を取つて居たさうである、此の學校始まつて以來こんなよい成績をとつた人はあるまいと語つてをられた。又非常に癩癩もちで始めて會ふあらゆる人と喧嘩をした。或る晩歸寮した時、「宮部これ壊すぞ」と云つて土瓶をたゝきわり「あゝいゝ氣持だ」と云つて、又新しいのを買つて返した事もあつたと云ふ、しかし宮部先生と内村氏とは四年間同室であつたが一度も喧嘩をしたことがないさうだ。

又こんな挿話もある。宮部先生が卒業の半年程前に、校長の家に呼ばれて、「君は植物をやつて居るが、卒業したら此の學校の教授になつてくれ、さうしたら東京へ留學させてやり、行く／＼は洋行もさせてやらう」と云はれたので宮部先生も非常に喜ばれた、この時校長から決して口外するなと云はれて歸寮された。歸つたら内村氏に「宮部今日良いことがあつたな」と云はれて、「いやなに面白い」とは云つたものゝ、「いや何かあつたらう」と問ひつめられて、遂に口外しない約束で校長の話を話した所、内村氏は非常に喜んでくれ、その約束は卒業まですつと守られたさうだ、南氏が卒業後駒場の農大に留學したのも同様の経緯があつたらしいとのことである。

東京留學中は「開拓使御用」の取扱を受けてゐたので生徒とはちがひ、給料を貰つて客分扱ひにされてゐたが聴講は學生並であつた、二年程東京に居てから後、校長の約束であつた外國への留學も果

されたさうである。

洋行の事については「寮のストーブを圍んでよく留學の話をしたものだ」と當時の人の非常に ambitious であつたことを説かれて次の様に語つた。即ち、先輩の内では一番に留學したのは廣井氏である、氏はミシシッピ河の工事に雇はれる交渉をして向ふについてからその金で勉強した。第二には内村鑑三氏、第三には新渡戸氏、これまではいづれも自費で洋行したが、四番目の宮部先生の時始めて官費で留學し、この時先に行つて居た、廣井、新渡戸氏等も彼の地で留學生を命せられた。尙廣井氏はエンヂニアリングをやつてゐたのでドイツに行つたさうである。

又一番に歸國したのは廣井氏で次に宮部先生、三番目に新渡戸氏である。

それから桑園の話が出た。黒田長官が明治八年頃蠶を飼う實驗に成功し、養蠶室を造り又、桑畑も今の桑園の附近につくつた、この當時は西八丁目以西は全く人家のない所であつた。これに酒田藩の士族をつれて来て開墾させ今の三井クラブの邊に流れがあつたので小屋掛けして二百人位居たが皆一刀たばさんで中々面白い装束であつたらしい、しかし一年位で開墾を終り歸國した。この事は札幌區史に出てゐるさうである。

植物園はもと道廳から土地を貰つて作つたものであるが、明治十九年先生が洋行中に道廳で區立病院（今の市立病院）を建てることになつて、今の土地を選定し土地が足りないので、温室の方へ割り込んだが、當時先生の留守中とて誰もそれに抗議するものがなかつた。そこで歸國後、反對にそれを

取り戻したので、病院の北側に今のやうな細い土地が出来たのである、その後も先生の御努力で少しづつ土地を増し、遂に現在のやうに廣いものが出来た。しかし場所が場所なので交通に不便を感じる者があり再三再四先生の所まで陳情に来るものがあつた、それを斷るのに苦勞してゐたが、園内の各所に御手植の木が植ゑられ、どう道をつけてもその木のどれかぶつかるとなつて仕舞つたので、その後陳情も沙汰止みになつたさうである。今にして思へば、札幌の中心にあのやうな廣い美しい庭園があつて市民の心をやわらげ、且又一朝有事の時には廣大な避難所ともなるのは實に宮部先生のお蔭である。

昔出版になつた寮史と此の寮史とは獨立教會の設立事情が少し異つて居るが、これは宮部先生のお話を伺つても明らかな如く、今度の方が史實に合つてゐるのである（舊寮史四十頁、新寮史三十八頁参照）。尙此の時クラーク先生から贈られた、金は百弗で日本の金にして三百圓位と思つて居たが先生のお言葉では百七十圓位ださうでこれは新寮史では訂正されてゐる。又此の時返却すべき金は四百圓からクラーク先生から戴いた分を差引いた額であるが、内村氏が委員長になつて有志が二十圓三圓と出し合つて集めたものださうだ、今とは違つて二十圓三十圓は當時の貧書生には大した負擔であつたらう。かくて生れ出た獨立教會は宗教團體法が出来た今日なほ大通教會と改稱して六十年の古い美しい傳統を傳へてゐる。

明治十年頃の札幌は人口約三千に過ぎず、餘り人口は殖えないで夜逃げをした者等あり、土地を賣

つて旅費にして歸つた者も居た、その土地を買ひ集めた者が今の大地主になつて居るのである。

遠友夜學校についても又興味あるお話が出た、新渡戸先生は洋行して居られた時分から宮部先生のお手紙の中に貧民學校を建てたいと云ふ事を書いてをられたのである、所が新渡戸先生の奥さん即ちマリーさんの實家エルキント氏の所に忠實な女中さんが長らく仕へて居たが、マリーさんが日本に來てからいくらかの金を残して亡くなつた、その女中さんが亡くなる時の遺言にその金をマリーさんに上げてくれとの事だつたので日本に送つて來た、これが基となつて此の學校はたてられたのである、即ち遠友とは外國の遠い友の意ださうだ。

雨龍學校のこともお尋ねしてみた所が、これはロシア風の丸太で造られた様な建物で卒業生が夜、室を借りて英語を教へてゐたことがあるが外に札幌農學校とは大した關係はなかつた様である。

又歴史については、歴史を書く者は正確に書かねばならぬ、一旦史實が間違つて傳へられると、仲々訂正し難いものだ、某氏は北海道史を書くのに現に生きてゐる前の北海道長官の施政方針の間違ひを指摘して書いた所、現長官が注意したが歴史は狂げることは出来ぬと云つて正さず、遂に解職になつたとその譯を教へて下さつたが、更に八十餘歳の高齢を以て史實を正すべく吾等の此の小さき企ての校正を見て下さつたことは實に感謝感激にたへない。この序でに分つたことはクラーク先生が雪の手稻山で植物採集された折に靴を脱いだ生徒を肩にのせて探らせたといふ話があるがこれは、この時だけではなく雪のない時にも圓山の奥で同様な事がありその時は生徒を背に靴のまゝ乗せたと云ふお

話である、此の小史には特に同様なことが他にもあつた事を記してないからこゝに書き加へておく。

尙開卷第一頁の題字「札幌農學校」及び「青年よ大志を懐け」はこの時、先生にお願いして書いて戴いたものである。その日の感激のまゝに、歸寮後山下・田中・石黒と共に語り合ひ記憶に残つてゐることを纏めてみたのである。

甚だ亂脈な纏まりのない文で申し譯ありませんが、寮史にとつて大いに意義のある教へに富んだ此の大先輩のお話を敢へてこゝに載せる次第です。(文責在 柴 田 明)

後記のこゝども

一、先づ第一に、本小史は宮部金吾先生の校閲をいたし、種々訂正して載いたものであることを大いなる誇りとするものである。特に、當年八十三歳の御老體にも拘らず一日中打通しに検閲していただき、且つ大切な御研究の一日を本小史の正確を期するために割かれて下さいましたこと、全寮生と共に深く感謝いたします。その上、本小史開巻第一頁、二頁の「札幌農学校」及び「青年よ大志を抱け」は、先生の筆になるものである。

二、題字を載いた今先生、及び序文を載いた青葉先生宇野先生、伊藤先生に對し、こゝに厚く御禮申し上げます。

三、編纂及び校正に於いて、富田信之、紫田明、日浦政之、齊藤靜郎、色部誠、田中稔、の諸君及び金子徳五郎君の御援助を感謝する。尙寫眞の編輯に於いては長尾富造、小島一男の兩君に負ふ所大である。

四、寮名「惠迪」は往々「惠迪」と綴らるゝことあるも、出典たる書經の大禹謨に「惠迪吉」とあつて迪の字が用ひられてある。簡野道明氏の「字源」に依れば迪の

項に、迪は迪の俗字とあるも、迪の項には、迪に作るは非と記されてある。

五、種々のため言譯のない程に遅延したこと、一に小生の責のあるところ、百拜頓首する次第である。

六、大東亞戦を戦ひて 上御一人の 御宸襟をなやまし奉つてをる我等、世界黎明の責を負へる我等、大いな使命を興へられ一刻も速かにこの課題を果して、死を賭しても世界を正しき平和にかへさればならない。今に至るもまだ戦ひにあるは悉く我等の罪業の故である。使命への怠惰の故である。吾等が今迄單に机上の理想をもてあそび、眞に逞しき眞理探究を怠つてゐたからである。今こそ生命がけて眞に求めるべきもの、眞に求めてゐる理想を把握し、世紀の課題に應へるときである。最後の審判は迫つてゐる。我等全心をあげてアンビションを把握すべきときなのである。今こそ青年のアンビションがきりぎりまで要求されてゐるのである。我等はこゝに敬虔なる合掌を捧げて革新を誓はせていたゞくと共に眞剣な償ひの道を歩まんとするものである。

七、かゝるとき、この小史の發刊を見、我等この小史に期するところも亦、その課題への献身的な應答でなけ

ればならない。小生不肖にして、その責を果たすを得ないものがあるが、これを機として更に第二、第三の突撃を取行せんとするものである。唯小生はこの小史の編纂中、よく内村鑑三先生の著書を読んで嗟歎之を久しくしたことを告白せねばならない。我が校の先輩に内村鑑三先生在り、この小史を物さんよりは先づ先生の著者一篇を讀むにしかずと言ひ度い位の氣持に屢々襲はれるのであつた。

即ちこの小史を手にする諸君に内村先生の著書一篇は必讀されんことを願ふものである。

八、最後に本小史の發刊に至るまで多々御援助を蒙つた諸先輩に厚く御禮申上げ且つ種々苦勞をかけた興文舎に對し感謝する。

昭和十七年十二月十九日

第二回寮史編纂委員會

代表 渡邊靜雄

昭和十七年十二月三十日印刷
昭和十八年一月二十日發行【非賣品】

北海道帝國大學惠迪寮
第二回寮史編纂委員會

編纂者 渡邊靜雄

代表者 渡邊靜雄

發行者 橋爪秀雄

札幌市南八條西八丁目

印刷者 林下忠三

札幌市南八條西八丁目

印刷所 興文舎印刷所

電話四三一九番





